能おおしま草紙　ミニ版 十二号　令和五（2023）年四月二十三日　発行

大島家の人びと―三十年のご縁を振り返って

三浦　裕子

喜多流大島能楽堂は二〇一三年に第二十四回催花賞を受賞されました。催花賞は法政大学が授与する賞で、能楽の振興と普及発展に貢献するなどした団体や個人を顕彰するものです。受賞のニュースを聞いて、大島能楽堂の長年にわたる活動が認められたことを大変嬉しく思い、贈呈式に馳せ参じました。その栄えある賞を約十年後の昨年（二〇二二年）、武蔵野大学能楽資料センターも頂戴しました。開設五十周年を迎えたセンターは、長い歴史を歩んできた大島能楽堂の足元にも及ばない存在ですが、それでも研究と普及と、両方を評価して下さったことをとても嬉しく思いました。贈呈式に大島輝久さんがご出席下さったのも、ありがたいことでした。

2023,1,17

第 44 回観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞者　第 32 回催花賞

稲田秀雄氏　山口県立大学　国際文化学部教授

味方玄師　シテ方観世流

武蔵野大学能楽資料センター

提供：野上記念法政大学能楽研究所

思えば大島家とのお付き合いも長くなりました。一九九三年に衣恵さんが東京藝術大学音楽学部に入学されたときからですから、この四月でちょうど三十年になりました。

藝大には謡曲部があり、伝統的に美術学部の学生が喜多流の謡を熱心にお稽古されていました。私は音楽学部でしたが、大学院生のときに入部し大村定先生に師事し、大学院修了後もＯＧとして参加していました。そこに衣恵さんが入部され、ともにお稽古を受け、学生能〈巴〉の地謡を謡うなどしました。のちに藝大に入学された紀恵さんともご一緒して佐渡の合宿に行ったこともあります。

一九八七年に私は武蔵野女子大学（当時。現在は武蔵野大学）能楽資料センターの助手になりました。やがて、文恵さんが短期大学部に来られて、塩津哲生先生がご指導下さっていた能楽研究部でお稽古に励まれていました。その頃、衣恵さんがセンターにアルバイトに来て下さっていました。ある日、文恵さんがセンターの衣恵さんを訪ねてきて、「今日、お財布を忘れちゃった」と言うので、衣恵さんが、「エエッ、でも、お姉ちゃんもあまり持ち合わせがない……」と渋々お金を渡していました。衣恵さんが長女の顔を見せた、私にとっては新鮮な瞬間でしたので、今でもよく覚えています。

そんなこともあって、衣恵さんの能を拝見するようになりました。たとえば、藝大では優秀な学生が卒業の際に皇居東御苑にある桃華楽堂で演奏する栄誉を与えられるのですが、それに選ばれた衣恵さんの仕舞を拝見しました。パンフレットに解説を書かせて頂くことになり、私にとっても貴重な経験になりました。

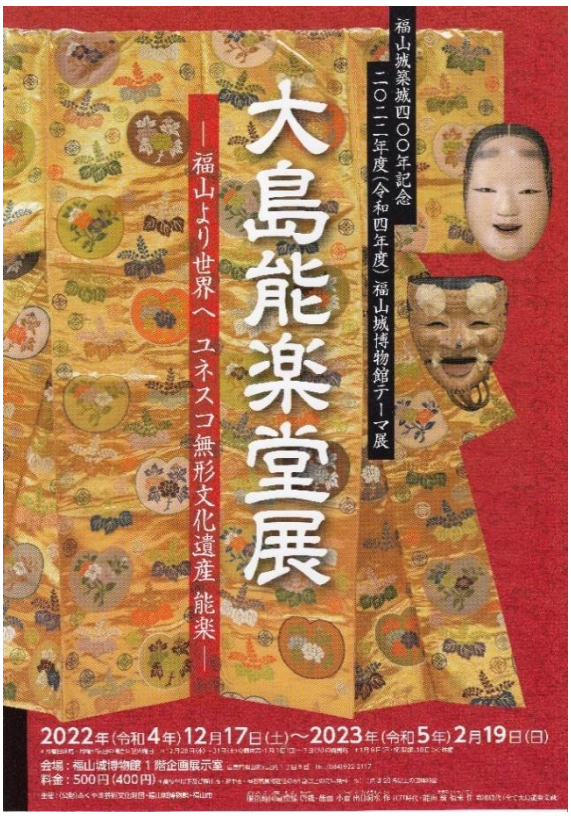
衣恵さんの卒業といえば、それを記念する能〈杜若〉を、一九九六年に開場したばかりの横浜能楽堂で舞われました。大島家の素人会での番外だったと思います。そこで信じられない光景を目撃しました。後見の久見先生が後見座に座られていると思いきや、気が付いたら揚幕内側に、あるいは客席の最後列に立たれて、衣恵さんの写真を撮りまくっていたのです。私たち観客は神出鬼没の久見先生に釘付けとなり、能どころではなくなってしまいました。お孫さんの晴れ舞台を天真爛漫に喜ばれているフツーのお祖父様としか見えず、厳格なお人柄と聞いていた先生のイメージとのギャップに驚きました。

先生は十四世喜多六平太先生に心酔しておられたことでも有名でしたので、あるとき、取材させて頂くことにしました。センターの研究室員と二人で福山を訪れる予定が、直前になって研究室員が体調を崩し、私だけがうかがいま

した。一人で訪れることを事前にお伝えする必要もないと思っていたのですが、それが大失敗。私の顔を見た途端に泰子さんがとても落胆され、私たちのためにうな重を用意していたのに…とお話し下さいました。何とも申し訳なく、こんな小娘（当時は）に対して大人に扱って下さったことに感謝しました（うな重はとても美味しかったです）。

大島家については皆様のほうがよくご存じかと思いますが、このように、非常に律儀で配慮に満ちた方たちでありながら、とても大らかなところがあり、その振り幅の大きさが大島家の家風かと思います。定期公演の解説に訪れた前夜、素敵なお店でのお食事にお招き下さり、お宿に戻る私にタクシーをご手配下さいました。ホストの政允先生は、ご家族が言うには「自家用車で帰る」とのこと。その自家用車というのがお店の裏に停められていた自転車!!気さくでお優しいお人柄が大島家の大らかさに繋がっているように感じました。

先日、福山城で大島能楽堂展が開催され、拝見にうかがったところ、地元の方と思しき人びとが大勢見に来ていました。灯台もと暗し、地域にある誇るべき財産を地元の方たちがよく知らなかったりします。そういう意味で、能楽堂展は大変よい機会になったのではないでしょうか。



大島能楽堂展　チラシ表面

例によって、大島家の人びとが渾身の力を込めて、この展覧会の準備に協力されたことかよくわかりました。素晴らしい能面・能装束および能楽資料が惜しげもなく展示されていましたが、なかでも、縫箔（紺地桜に霞模様）と長絹（紫地扇面下り藤模様）の意匠と色調に魅せられました。後からチラシ裏面を見たら、この二領の写真が大きく掲載されており、大島家ご自慢の装束であることと、美術品としても価値の高いものを収集してこられたご努力を確認したように思いました。と同時に、大島能楽堂で能を鑑

賞する贅沢さもわかったような気がしました（受付で女性陣がかいがいしく優美に振る舞う姿を拝見するのも眼福。樫木端で提供されるワッフルは極上の美味）。

学生時代、英語の授業でgeneration（世代）は三十年がひとつの単位と教わりました。輝久さんのご長女である薫子さんも大学進学を控えた年頃になり、ご長男の伊織さんは今年の厳島神社桃花祭神能で能〈枕慈童〉を舞われるとうかがいました。衣恵さんを通じて大島家と結んだご縁がちょうど三十年。次世代が活躍する時代に入ったことを実感しています。

私のおもな研究は能・狂言の音楽と歴史です。ですので、明治維新の動乱期に地方の藩に仕えていた役者が能・狂言の復興に尽力した姿を追い、感動することもしばしばです。少子高齢化の波が押し寄せている現在、能楽界を取り巻く状況には非常に厳しいものがあります。維新の頃と同様、能・狂言を救うのは地方のパワーなのではないかと思ったりしています。そのなかで、大島家の果たす役割は益々大きくなると確信します。一方の私は何をすべきなのか。能・狂言と出逢ってから長い時間が経ちましたが、拝見するたびに新たな発見があります。久見先生が取材時に「お能は楽しくなければいけない」と言われた言葉がとても印象に残っています。私なりの発見を楽しく伝えることも大事な仕事なのではないかと思っています。

武蔵野大学文学部教授／
能楽資料センター長

武蔵野大学能楽資料センター